

心をつなぐ「絆の芽」 ―「かまぼこ板の絵」物語(その二)―

西予市立美術館「ギャラリーしろかわ」元館長

浅野

幸江



夢を叶えた少年

令和2年4月1日、岩手日報の一面トップは「古里思い出発進行」という大きな記事。「復興と成長期す」と添えられた文字。宮古駅でアナウンスの練習に取り組む佐々木翔太君の笑顔があった。コメントは「人々の生活を支え、地域の魅力を発信したい」と。

あのまん丸い……コロコロしたかわいい小学生が立派な青年になってマイクを握っていた。高校を卒業し、就職したことは聞いて



三陸鉄道に入社した佐々木翔太君(三鉄のハイカラガイドさん、翔太君のお祖母ちゃんとお母さんと一緒に記念撮影)

いた。でも、彼の夢であった三陸鉄道の運転士候補生になったことは知らなかったので、びっくり。胸がいつぱいになり、涙があふれた。

東日本大震災から丸9年。10年目の新年度は「成長」という感動から始まった。

彼の夢は「鉄道マン」になることだった。東日本大震災と令和元年の台風19号の被害から復活した通称「三鉄」に、新戦力として加わった岩手県宮古市田老地区に暮らす佐々木翔太君(当時18歳)。

翔太君は、高校時代「三鉄」に乗って通学した。台風19号で「三鉄」が運休した時には、アルバイト代の一部を義援金として「三鉄」に贈ったほど、「三鉄」愛にあふ

れる少年だった。

「目や足が不自由な高齢者の方に手を貸す運転士」の姿を見て憧れたという。運転士候補生となった今、「多くのことを学んで皆さんの暮らしを支えられるような人間になりたい。」と語っていた。採れたてのミニトマトを「おいしい！おいしい！」と叫び、「おいしい！」と叫び、「トマトに酔った！」と転げ回って笑わせてくれたあの少年が……と、過ぎた時間が成長という大きな感動に変わっていき、「お世話になった愛媛のみなさんにご恩返しをしたい。」という彼の言葉に胸が「きゅん、きゅん」と鳴りっぱなしだった。

思い出してみれば

私の住んでいる愛媛県西予市から1,400キロも離れている岩手県宮古市田老地区とのご縁を、不思議に思われるかもしれない。田老地区のみなさんとは、あの震災をくぐり抜け奇跡的に届いた

「かまぼこ板に描いた絵」を通して深い絆で結ばれ、今尚、いろいろな交流が続いている。

きっかけは、西予市で毎年開催している全国「かまぼこ板の絵」展覧会(令和2年は、新型コロナウイルス感染症の影響でお休みしましたが、第26回展は令和3年9月11日～令和4年2月13日まで開催。展覧会開催中は、奇跡的に届いた作品・感動賞「田老発2011・3・11」を見ることができました。)

振り返れば、あの大地震が起きて8日目。

まだ、悪夢のような状態の中、西予市立美術館「ギャラリーしろかわ」に、「岩手・宮古」の消印が押された郵便物が届いた。宮古市立田老第三小学校からのかまぼこ板の絵の応募作品だった。

田老地区といえは万里の長城といわれた防潮堤が崩れ、甚大な被害が出たところ。封筒の中には、当時小学3年生の子ども達3人と

担任の先生がかまぼこ板に描いた春の到来を感じさせる花や虫の絵など6点の作品が入っていた。その中の作者の一人が佐々木翔太君だった。翔太君の作品は、震災直前にデビューした東北新幹線「はやぶさ」と、乗ってみたい「東京の地下鉄」の絵。消印は、3月17日。「かまぼこ板の絵を送ってくれた4人は、大丈夫なんだろうか……」、何度かけても通じない電話に心配が重なり、「連絡をください。」と出した手紙に対する返事が届いたのは4月6日だった。

担任の千葉朋子先生からで、「全員無事です。」と書いてあった。千葉先生によると、全校児童9人の学校。展覧会のチラシを見て、3年生みんながかまぼこ板に絵を描き、震災が起きる3時間ほど前に投函したとのこと。震災の後は、そのことすら忘れていたと。

そんな出来事を知って、私達は体が震えた。あの大津波を乗り越え、元気いっぱい作品が届いた

ということ。それはもう「奇跡」としか思えない出来事だった。千葉先生のお手紙の最後には、「今回の震災で『失ったもの』はたくさんあります。しかし、人とのつながりのように『得たもの』もたくさんあります。これから、東北から明るいニュースをたくさん伝えられるよう頑張ります。」と書いてあった。

私達は、「こんな残酷で辛い時だからこそ、何か楽しい思い出をプレゼントしたい！」と全国のみなさんに募金をお願いし、震災直後の夏休みに子ども達、親御さん、



平成23年7月、「ギャラリーしろかわ」で「新幹線はやぶさ」の絵を指さす翔太君(右端)

先生方を「かまぼこ板の絵展覧会」にご招待。出会いを作ることができた。

その時に聞いた話は、忘れることができない。「海から大砲のような音が聞こえ、背中に津波のしぶきが飛んで来た。恐怖で、何度も後ろを振り返った。」とか、「海が、運動場が立ち上がったようになり、襲いかかってきた：：」という子ども達の言葉が生々しくよみがえる。

私達は、この小さな板の絵が結んでくれた「絆」を大事にし、ずっと交流を続けてきた。そんな私達に、「夢を叶えていく」子ども達の成長が板についた大きな感動となつて返ってきたのである。

困難を克服した成長の芽は、惚れ惚れするほど遅しく素晴らしいものになっていた。

もう一つの芽

「復興みかんの木」

震災があった年の暮れ、「せめ

ておコタで愛媛みかんを：：」と、お餅とみかんを送った。田老をお訪ねした平成24年の11月、仮設で営業の「善助屋」食堂にみんなが集まって歓迎してくださった。忘れられない味の「どんこ唐揚げ丼」をご馳走になり、いろんなお話を伺った。その時に丹野聖也君のお母さんから「愛媛みかんの種を植えたなら、こんなになつたんよ。愛する媛の国から届いた復興みかん！」と、20センチくらいのみかんの苗木を渡された。きれいにラッピングされたみかんの苗木。思わぬプレゼントにびっくりし、胸がいっぱいになった。一箱のみかんの中に5粒の種があったという。プランターに入れておいたら5つとも芽を出したと。

岩手から帰る時、津波で破壊された防潮堤の水門のところと浄土ヶ浜で一個づつ拾った石が二つ。「復興への祈りを込めて握りしめてください。」と展示室に置いた。一つは石に鼻緒を描いて「復



田老第三小学校全校児童と復興みかんの苗木と浄土ヶ浜で拾った石

興が早く進みますように！」。もう一つは手のひらにすっぽり入り、「思いが届きますように！」と願いを込めた。今度、田老に行く時に元のお返しにいたしますからと、海に約束した石。みなさんが祈りや願いを込めていただき感動だった。それと一緒に「復興みかん」の苗木も展示。来館者のみなさんにそれらの出来事をお話した日々。

中学2年生になった畠山陽光君、丹野聖也君、佐々木翔太君がメッセージを付けて送ってくれた。平成24年に私が持ち帰り、「ギャラリーしろかわ」で育てていた苗木は、愛媛みかんの発祥の地「宇和島市吉田町」に植樹。

田老からお里帰りした苗木を西予市明浜町の夕焼け山という兵頭岩雄さんの段々畑に植樹。実を付ける目標を苗木を送ってくれた彼達が20歳を迎える年とした。そして、このみかんの木の名前を復興みかん「えがおの木」と名付けた。それから2年。平成29年3月、



みかんの苗木を送るために集まった子供たち
(左から畠山陽光君、丹野聖也君、佐々木翔太君)



復興みかん「えがおの木」

この木のそばに看板を建てた。看板は、縦1・9メートル、幅1・8メートルのステンレス製。かわいらしい猫の絵で、岩手と愛媛とご縁や交流の様子を表現し、写真8枚も入れた。絵を描いてくれたのは、自らも震災の被災者である紺野ときよさん(盛岡市)。看板の製作費は寄付で賄い、かまぼこ板の絵でつながる仲間を「かまぼこ板の絵家族の会」と称した。震災から6年後の3月11日、ささやかな看板の建立式。家族の会の仲間30人が昼過ぎに集まり、地震が

起きた午後2時46分に黙祷し、「みかんの花咲く丘」を大合唱。

「今日という日を被災した人たちの絆を固め、育てていく日にしよう。」と誓い合った。

夕焼け山の園主・兵藤岩雄さん（当時61歳）は、「『えがおの木』一本だけじゃあ寂しいだろう。」と、周囲のみかんの成木を伐採。えがおの木に、前年接ぎ木した同じ木を基に約20本を植樹。一枚の段畑を「復興みかん園」にしてくれ、「立派に育てるので、多くの人に見守ってほしい。」と言ってもらった。

「えがおの木」と看板がある場所は、四国ジオパークの見どころ



復興みかん「えがおの木」の看板



震災から6年後の3月11日、復興みかん「えがおの木」の看板の前で黙祷

の一つの「だんだん畑」。収穫は、子ども達が「ハタチ」になる5年後。岩手の子ども達を囲んで、みんな一緒にみかんを食べるといいう甘酸っぱい夢を描いた。「えがおの木」の看板には、こんな決意も書いた。

岩手県の田老で芽生えた愛媛みかん

東日本大震災が起きた日のこと
震災が起きる直前に投函された

「かまぼこ板の絵」が

山の中の小さな美術館に
奇跡的に届いた日のこと

そしてその年の表彰式に
田老から来てくれた子供たち
これら全てのことを知っている
「復興みかんえがおの木」根っ
こは絆
必ず日本一のみかんになります

悪夢のような西日本豪雨

平成30年7月7日の朝、豪雨に襲われた。

消防団員である息子に出勤命令が出た午前6時過ぎには、川が氾濫し、橋の上を濁流が流れていた。上流に行かないと向かいのお年寄りを救出できない状態。そうしているうちに、地鳴りのような音がして山が崩れ落ち、向かいの家になだれ込んだ。

ちょうどその頃、我が家から車で5分の野村町は、豪雨とダムの放流が重なり、町が浸水。650戸を超える家々が浸かる被害を受け、5人が亡くなった。家が流され、山からの大木が流れ、それが渦を巻いて橋に引っかけ、水か



豪雨による被害



豪雨により浸水した「乙亥会館」周辺

さが増えていく。本当に地獄絵のようにもごいものだった。町のシンボルだった「乙亥(お

とい)会館」も浸水。完成間近で、9月1日から始動予定の給食センターも壊滅。保育園も流された。

田老のみなさんを招待した時、160年ほど前から続いている「乙亥大相撲」の歴史を語り、乙亥会館のシステムを自慢しながら説明した大きな建物だ。枚敷席984席と固定席534席の合計で1,518席というビックなもので、格納収納方式というボタン一つで入ったり出たりというシステム。今までバレーボールをしていた会場がボタン一つで国技館に変わるという凄なものだった。そんな会館の手前は265年続いた造り酒屋の「緒方酒造」。その屋根に酒を造るタンクが被さっているという酷い光景。街全体が残骸状態だった。

七夕の日の「まさか！まさか！」の出来事だった。本当に……まさか自分達の町に仮設住宅が建ち並ぶようなことは思ってみたこともなかった。

そんな私達のところに、田老の畠山陽光君のお父さんが中心になって、「あの時のご恩返し」にと、田老のみなさんから救援物資や義援金、励ましの手紙や応援メッセージが届き、元気をいただいた。避難所にいる被災者には心のもった励ましの葉書が届き、絆の強さが身に沁みだ。 「ギャラリーしろかわ」には、田老第三小学校の全校児童から激励のメッセージが寄せられ、勇気をいただいた。豪雨で今までの生活全てを無くした友がしみじみと言う、「あの時……田老第三小学校の校長先生が言われた『てんでんこ』という言葉を他人事で聞いていたように思う。私は貴重品を持ち出し、車で逃げようとして車ごと流された。車から引っぱり出してもらい、水が引くまでの一時間は屋根の上にあった。『危ない』と分かった時、直ぐに行動しておけばこんな恐怖を味わうこともなかった。」と。

被災の後、ご両親を続けて亡く

し、今、彼女は白血病と闘いながら「とにかく逃げる」ことの大切さを「てんでんこ」という言葉で繰り返す。

とにかく、「命を守る」ことを肝に銘じておきたいと思う。

豪雨から3年という月日が流れただけ、まだまだ復興には程遠く、仮設住宅が並んでいる。

そんな中、みんなが口にされるのは「3年前の豪雨災害がコロナウイルスとの戦いも加わる今だったら……」という強い恐怖。そのことも考慮しての備えがあること。「避難のスイッチ、命のスイッチ」をいつでも「ON」にできるようにしておくことだと。

「まさか！」は、いつも突然にやってくるから。

夢を叶える絆ツアー

考えたこともなかったような「コロナ禍」という生活の中で、今、私達がワクワクしているツアーが二つ。

一つは、「運転士になる」という夢を叶え、「三鉄」の運転士になった佐々木翔太君の運転する列車に乗りに行くツアー。

東日本大震災で大変な目に遭った子ども達だけど、夢に向かって見事に成長してくれた。その中の一人、翔太君は、「あの時、物心両面で復興支援してくれた愛媛のみなさんを運転士になれた時には乗せて走りたい。ご恩返しをしたい。」と語ってくれていた。

あの新聞記事が宝物に、元気の基になった。

翔太君に電話をして、いろんなことを聞いた。翔太君は、今、仕事の日には朝4時30分には家を出て、5時45分から勤務するという。「三鉄」は、高校の下級生も利用していて「先輩！」と声を掛けられたり、上司の定期券を点検したり、お互いに挨拶を交わすのが嬉しいと話し、毎日が楽しくてたまらないという。まだ、運転士候補生で、今年の3月に仮免許的な試

験があり、順調いけばこの秋には独り立ちすることができるとも思えないと日々励んでいるとのこと。そんな話を聞き、私達はワクワク・ドキドキ。「秋になったら、翔太君の運転する列車に乗りに行こう！」とツアーを計画。コロナ禍の憂鬱な中で、この話になると急に元気になり、みんなニコニコ。「宮古に行くまでは病気すられんよ。」とか、「あの子たちに『誰?』って思われんように、きれいでおうね。老けられんよ。」とか、「旅費貯めてこうな。」とか、「コロナにかかれんよ。」とか前向きになり、話が弾む。「夢を叶えた少年の運転する三陸鉄道に乗る。」こと、それが今の私達の励みになっている。仲間の中には百歳に近い女性もいて、「私のことも忘れんとつてよ。」と。

そして、もう一つは、西予市で育っている復興みかん「えがおの木」のみかんをみんなで食べることに。彼らが20歳になる今年、「必

ず実をならせる！」と夕焼け山の園主・兵頭岩雄さんが頑張ってくれ、3月には花を咲かす。岩手で芽を出した「えがおの木」もハタチになった彼らが来るのを楽しみにしていると思う。

春、3月は、町中がみかんの花の香りに包まれ、香りの中に町があるという明浜町。

お互いの夢が行ったり来たり。小さなかまぼこ板の絵から始まったご縁から、芽が出て元氣と勇氣をもらっている。正に板についたご縁、「絆」の芽の成長だと誇らしくとても嬉しい。

しっかりと根付いた「絆」の結実として、宇和海を眺めながら「えがおの木」のみかんを「みんなで食べたい！」と願っている。

みなさん、是非、ご一緒にしてください。

おわりに……

昨年の4月、NHKのラジオ「マイあさだより」で佐々木翔太君の

お話をした。それを聴いていたいた全相協の前の専務理事・水野雅充様が、現業務部長・白浜一彦様に話をつないでいただき、7年前に書いたレポートの続きを書くことができた。これも不思議なご縁で「絆」だと感動だった。東日本大震災という大変な災害で結んだ「絆」をこれからもご指導いただきたいとお願いしたい。

同じようにラジオを聴いていただいた田野畑村診療所長・近江三喜男先生からは、ご自分で撮影された「三陸鉄道・全駅踏破」というご本が送られてきた。見事なご本！

今回は、佐々木翔太君のみの紹介になりましたが、畠山陽光君は、「教員になりたい！」と大学で猛勉強中。丹野聖也君は会社員となり、一家の大黒柱として大活躍。みんな目映いばかりに成長してくれた。

そんな彼らのことを、ミュージカルにしたいと嬉しい連絡をも

らった。

愛媛を中心に活動し、海外公演でも活躍しているミュージカル劇団「みかん一座(座長・戒田節子)」。その「40周年記念ミュージカル」として、岩手と愛媛で公演したいという。

2年後だけど、楽しみがまた一つ増えた。

これからも、みなさんに支えられながら、助けられながら、彼らとの交流を続け、成長を見守っていきたいと思っている。そんな私達もそれぞれに頑張っていて、いい先輩として生きていきたいと気持ちを引き締めさせていただいた。

本当にいろいろありがとうございました。

※ 今回の特別寄稿は、浅野幸江さんに、季刊行政相談第142号(2014年8月)にご寄稿いただきました『心をつなぐ―「かまぼこ板の絵」物語―』のその後について、ご寄稿いただきました。